

## 特別講演1「医史学からの風」

## 近代医学が歩んできた道——世界の中の日本の医学

坂井 建雄

順天堂大学

COVID-19という人類が初めて遭遇した脅威に対して、現代の医学・医療は医療崩壊に迫る苦戦をしながらも、超スピードでワクチンと治療薬を開発するなど大いに健闘している。今から半世紀前の医療では、癌は死の病と怖れられ、患者に癌の告知をするのは稀であった。そして一世紀前には結核が最大の死因であった。医学の歴史を振り返ってみれば、近代医学が積み重ねてきた進歩によって、実に大きな恩恵が人類にもたらされてきた。

近代医学を生み出した西洋医学も、18世紀までは古代からの伝統を引き継ぐ西洋伝統医学で、身体症状を病気として捉え、効果的な治療法もなかった。ただ外科学と解剖学は優れていて、紅毛外科や『解体新書』（1774）として江戸時代の日本にもたらされた。

19世紀前半から西洋では病理解剖が活発に行われ、臓器の病的変化（肺疾患、腎疾患など）を病気として捉えて身体症状から区別するようになった。近代医学の歩みはここから始まる。日本では、華岡青洲が全身麻酔による乳癌手術を行い（1804）、シーボルトが来日して医学を教え（1823–28）、緒方洪庵の適塾（1835–）が蘭学を広め、漢蘭折衷の医学が広がったが、ジェンナーによる種痘（1798）の伝来は遅れた（1849）。

19世紀後半の西洋では、麻酔（1846）と消毒法（1860年代）により外科手術が大きく発展し、病原菌が発見（結核菌1882、コレラ菌1884）されて細菌学が始まり、レントゲンがX線を発見（1895）して生体内の観察に道を開いた。日本では、ポンペによる医学伝習（1857–62）、東京大学でのドイツ流医学の導入（1871–）、医制（1874）による医師資格制度と医術開業試験、公立医学校での医学教育と診療（1876–1887）により、近代医学が全国に広まった。コレラと赤痢が猛威を振るった。

20世紀前半から、日本の医学は世界と足並みを揃えるようになった。医学系の学会の集まりである日本医学会が始まり（1902）、専門学校令（1905）と大学令（1918）により2種類の育育機関（大学、医専）が併存した。生化学が進歩して、ビタミンとホルモンが発見された。インフルエンザがパンデミック（スペインかぜ1918–20）を引き起こし、結核は不治の病かつ最大の死亡原因であった。

20世紀後半に、日本はGHQの指令により医療制度改革を行った。インターン制度と医師国家試験（1946）、6年制の新制医科大学（1947）が始まったが、インターン制度は臨床研修制度に代わった（1968）。1970年代に医科大学が大幅に新設された。ペニシリンの実用化など種々の抗生剤により感染症が克服され、循環系の疾患と悪性腫瘍が死亡原因の首位を占めるようになった。DNAの二重らせん構造が発見され（1953）、免疫学が始まった。

1990年代以降は精密医学の時代である。画像診断（CT、MRI）や内視鏡により生体の内部が可視化され、早期に正確に病変の診断が可能になった（病理解剖による死後の診断に代わって）。治療方法が科学的に検証されて治療ガイドラインが作成され、誰もが標準的な医療を受けられるようになった（経験知に基づく名人芸的な医療に代わって）。医師と患者は対等の関係で説明と約束に基づく医療が行われるようになった（信頼に基づく父権的な関係に代わって）。医師に加えて多職種の医療者が協力するチーム医療が行われるようになった（あらゆる仕事を医師が行う医療に代わって）。